

# 山岳白書

令和2年中の北アルプス登山者と遭難事故のまとめ



岐阜県北アルプス山岳遭難対策協議会

## はじめに



岐阜県北アルプス山岳遭難対策協議会  
会長 國島芳明（高山市長）

令和2年は、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行や7月の豪雨災害などこれまでに経験したことのない激動の1年でありました。

新型コロナウイルス感染症の猛威から始まり、4月7日には国から緊急事態宣言が発令されました。また同時期には、岐阜県飛騨地方及び長野県安曇野地方を中心とした群発地震が発生し、震源地に近い奥飛騨温泉郷付近では、時に震度5を観測し、昼夜を問わず発生する地震になすすべがありませんでした。

群発地震が小康状態になりはじめた7月上旬には、飛騨地方を豪雨が襲い、至る所で土砂崩れが発生し、国道も寸断され、一時は奥飛騨温泉郷などの一部地域において孤立状態となりました。さらには地震と豪雨の影響で登山道への被害も大きく、岐阜県側から奥穂高岳へ向かう白出沢ルートは登山道が崩落し、通行不能となってしまいました。

このような厳しい情勢の中で始まった登山シーズンですが、例年、多くの登山者で賑わう北アルプスも、山小屋内での3密を避けるなどの感染予防対策を余儀なくされ、完全予約制による宿泊制限、営業を取りやめる山小屋など、シーズン前からコロナ対応に追われたところ です。

登山届による登山者数は、27,966人で前年比マイナス41.5%と大幅に減少し、また遭難事故に関しても、発生25件、遭難者数25人（うち、死亡3人、負傷者15人、無事救助7人）と平成10年以来の少ない発生件数となりました。

しかし、登山者が少なかったとはいえ遭難事故は発生しており、3人の尊い命が失われています。そして、コロナ対策として感染予防の徹底を図りながらの救助活動は負担が大きく、救助現場での活動は大変な苦労があったと聞いております。

新型コロナウイルスや豪雨、地震などの大きな困難の前では、人間は大変無力ではありますが、北アルプスを訪れる登山者にとって、安全・安心に登山することができるよう、そして悲惨な遭難事故を1件でも減らせるように、今後も関係の皆様方のご理解、ご協力を賜りますようよろしくお願い致します。

令和3年3月

# 目 次

第1	登山者の状況	
1	過去10年間の登山者数等の推移	1
2	シーズン別及び年齢別等登山者数の状況	2
第2	山岳遭難事故の状況	
1	令和2年中の遭難事故の状況と特徴	3
2	過去10年間の発生状況	4
3	月別発生状況	4
4	山岳別発生状況	5
5	原因別・遭難者の性別発生状況	5
6	遭難者の山岳会所属状況	6
7	登山届の提出状況	6
8	遭難パーティーの人数構成状況	6
9	遭難者の年齢別状況	7
10	遭難事故の届出状況	7
11	遭難者の職業別状況	8
第3	山岳警備活動の状況	
1	山岳警備活動の概況	8
2	安全登山指導活動の状況	8
3	山岳遭難救助活動の状況	9
4	ヘリコプターの活用状況	10

別表1 令和2年・山岳遭難事故発生分布図

# 第1 登山者の状況

## 1 過去10年間の登山者数等の推移

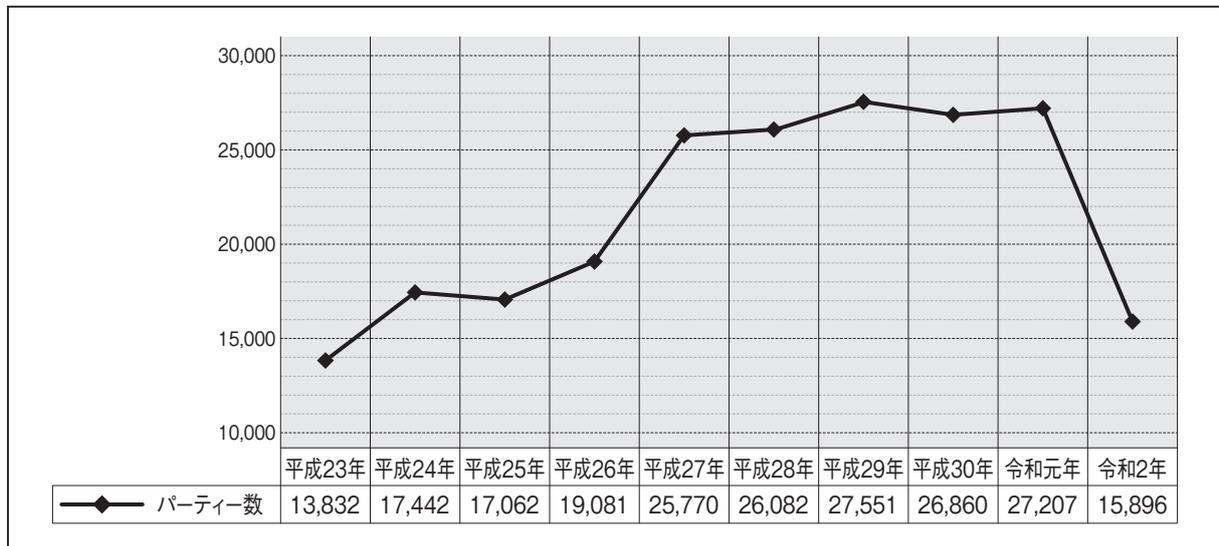
令和2年中の登山届による岐阜県側からの北アルプスへの登山者数は、  
**15,896パーティー、27,966人**  
 を数え、前年よりパーティー数では-11,311パーティー（41.5%減）、登山者数についても-27,012人（49.1%減）と大幅に減少した。

また、このうち単独登山者は、  
**8,821人（前年比 -5,373人）**

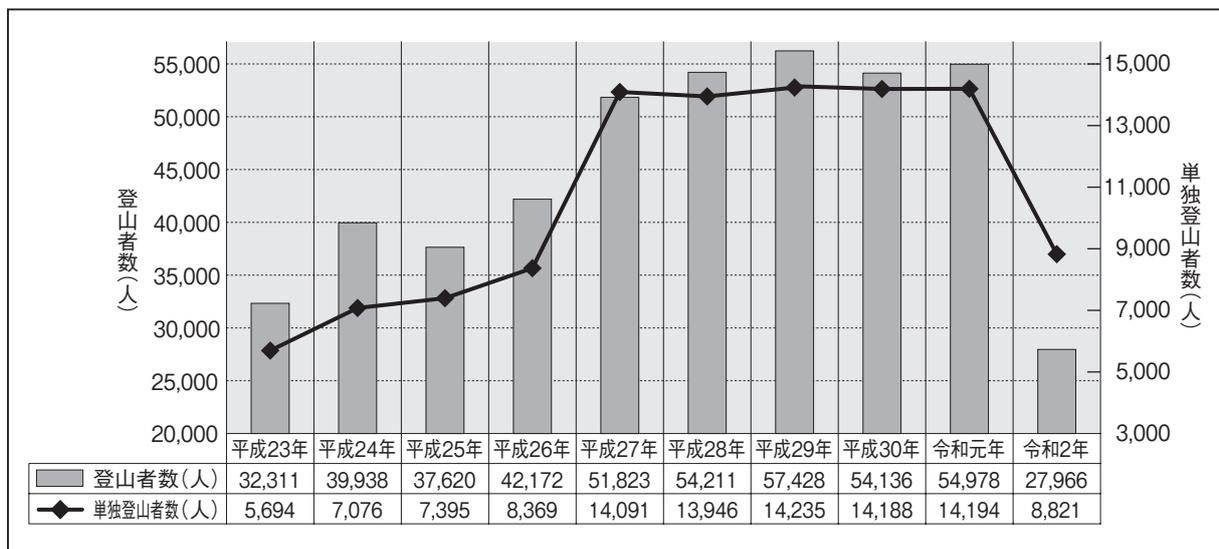
となり、登山者数に占める単独登山者の割合は、31.5%であった。

コロナ禍が大きく影響し、登山者数では過去10年で最も少なくなり、ツアー登山や団体登山が減り、単独や2人パーティーなど少人数登山の割合が高かったと思慮される。

### 【パーティー数の推移】

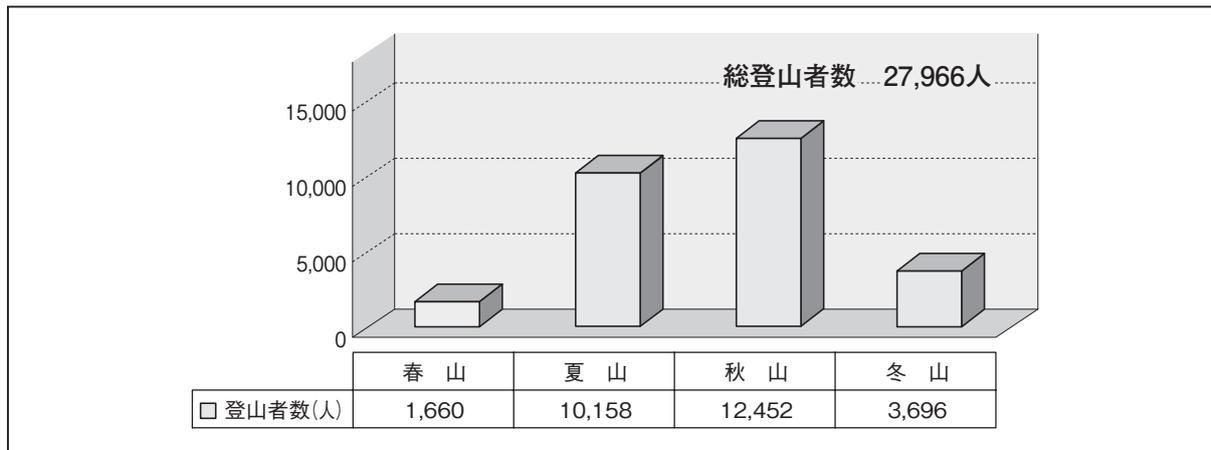


### 【登山者数の推移】

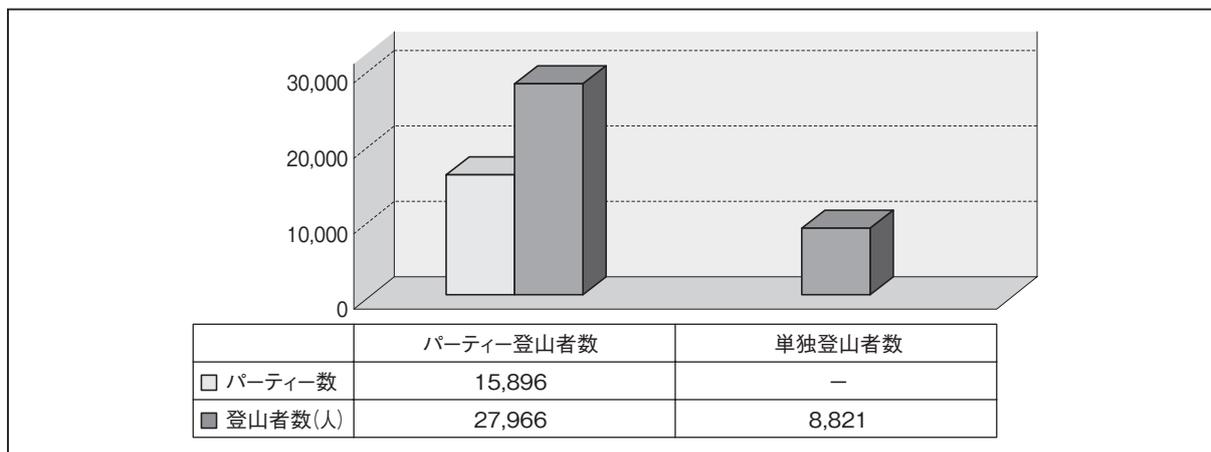


## 2 シーズン別及び年齢別等登山者数の状況

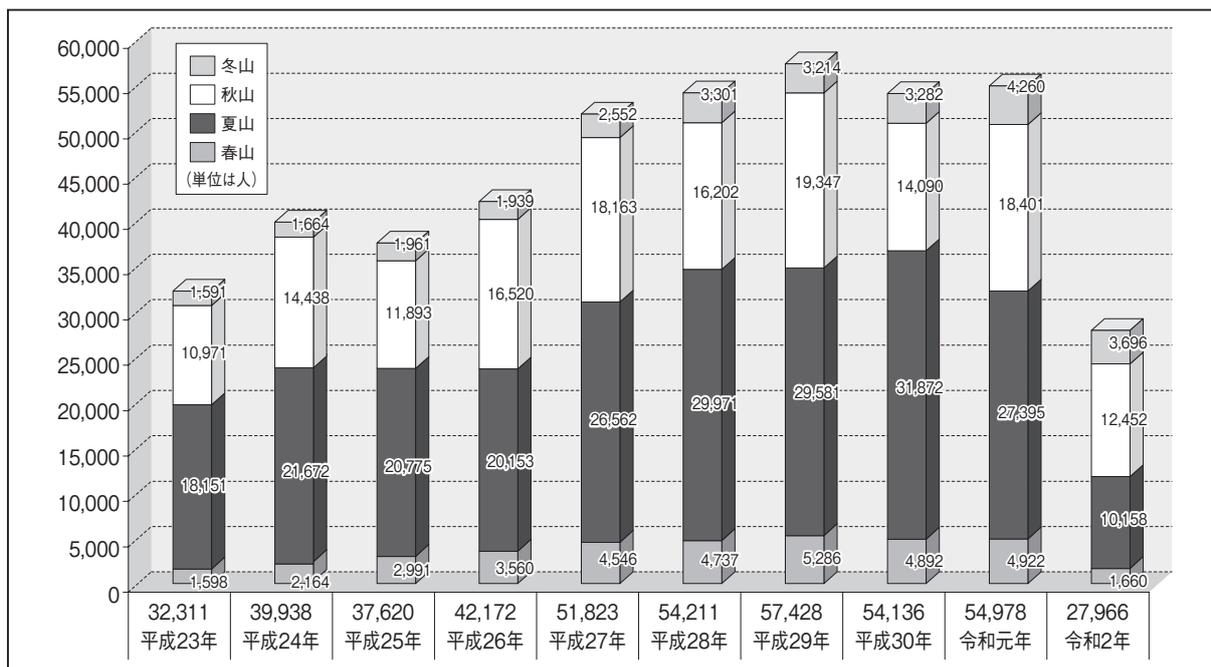
【シーズン別登山者数】



【パーティー・単独登山者別】



【過去10年間の推移】



【年齢別・シーズン別登山者の状況】

(人)

	10歳未満	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80歳以上	不明
春山(3~5月)期間	2	13	130	284	447	401	209	44	2	128
夏山(6~8月)期間	72	198	822	1,444	2,443	2,472	1,384	423	15	885
秋山(9~11月)期間	110	152	1,035	1,756	3,085	2,925	1,769	573	21	1,026
冬山(12~2月)期間	6	15	391	646	951	893	369	107	0	318
合計	190	378	2,378	4,130	6,926	6,691	3,731	1,147	38	2,357
若年・中高年別	7,076人(25.3%)				18,533人(66.3%)					(8.4%)
総計	27,966人									

## 第2 山岳遭難事故の状況

### 1 令和2年中の遭難事故の状況と特徴

令和2年中の遭難事故発生件数、遭難者数は  
25件(前年比-22件)、25人(前年比-25人)

で、内訳は、

死者3人、負傷者15人、無事救出等7人

となった。

遭難事故の特徴としては、

- 未組織登山者による遭難事故が22件(88.0%)と多発
- 遭難者25人のうち40代以上の遭難者が22人(88.0%)と過半数を数えた
- 単独での遭難事故が16件(64.0%)と多発
- 25件のうち、登山届未提出は4件(16.0%)にとどまった
- 遭難者における男性の割合は21人(84.0%)となった

区分	年別	令和2年	令和元年	増減数	増減率(%)
発生件数(件)		25	47	-22	-46.8
遭難者数(人)		25	50	-25	-50.0
内訳	死亡	3	8	-5	-62.5
	行方不明	0	0	0	0.0
	負傷	15	27	-12	-44.4
	無事救出等	7	15	-8	-53.3

令和2年中に発生した山岳遭難事故の概要は、別表1「令和2年山岳遭難事故発生分布図」のとおりである。

## 2 過去10年間の発生状況

山岳遭難事故は25件となり、過去10年間では最も少ない数字となった。

区 分	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2
発生件数(件)	51	43	52	51	42	51	40	34	47	25
遭難者数(人)	61	53	64	70	50	66	45	35	50	25
死 亡	5	9	9	15	7	6	2	5	8	3
行方不明	0	0	1	1	0	0	0	2	0	0
負 傷	25	30	34	31	25	29	27	16	27	15
無事救出等	31	14	20	23	18	31	16	12	15	7

## 3 月別発生状況

例年、遭難事故多発傾向にあるゴールデンウィーク期間中は、非常事態宣言により山小屋の営業も自粛となり登山者も少なかったものの、宣言前後では遭難事故が発生している。

区 分		発生件数	遭 難 者 数				計
季節別	月 別		死 亡	行方不明	負 傷	無事救出等	
冬 山	1月	3	1		2		3
	2月	1	1				1
春 山	3月	3			3		3
	4月						
	5月						
夏 山	6月						
	7月	2			1	1	2
	8月	6			3	3	6
秋 山	9月	5	1		4		5
	10月	4			2	2	4
	11月	1				1	1
冬 山	12月						
合 計		25	3		15	7	25

## 4 山岳別発生状況

穂高連峰において発生が多くなっているが、双六岳方面においても遭難事故が発生した。

山 域 / 区 分		発生件数 (件)	遭 難 者 数 (人)				
			死 亡	行方不明	負 傷	無事救出等	計
穂 高 連 峰	西 穂 高 岳	4			4		4
	間 ノ 岳	1			1		1
	奥 穂 高 岳	5			3	2	5
	涸 沢 岳	4	2		2		4
	北 穂 高 岳	1			1		1
	槍 ケ 岳	1			1		1
黒 部 五 郎 岳		1			1		1
双 六 岳		3			1	2	3
弓 折 岳		4			1	3	4
笠 ケ 岳		1	1				1
計		25	3		15	7	25

## 5 原因別・遭難者の性別発生状況

滑落・転倒などは依然として多いものの、発病や道迷いによる救助要請も多く見られた。  
また、遭難者に占める男性の割合が25人中21人(84.0%)と高い。

原因別 / 区 分		発生件数 (件)	遭 難 者 数 (人)					遭難者の性別	
			死 亡	行方不明	負 傷	無事救出等	計	男性	女性
転 滑 落	つまずき・スリップ	2			2		2	2	
	バランス崩し	3	1		2		3	3	
	そ の 他	5			5		5	5	
転 倒	つまずき・スリップ	3			3		3	3	
	バランス崩し	2			2		2	1	1
発 病		3				3		2	1
疲 労 ・ 体 力 不 足		2				2	2	2	
道 迷 い		2	1		1		2	2	
そ の 他		3	1			2	3	1	2
計		25	3		15	7	25	21	4

## 6 遭難者の山岳会所属状況

未組織登山者による遭難事故は22件発生し、全体に占める割合は88.0%となっている。

区分 所属別	発生件数 (件)	遭難者数(人)					比率 (%)
		死亡	行方不明	負傷	無事救出等	計	
社会人山岳会	3	1		2		3	12.0
ツアー・ガイド登山	0					0	0.0
未組織	22	2		13	7	22	88.0
計	25	3	0	15	7	25	100.0

## 7 登山届の提出状況

遭難事故に対する登山届の提出率が84.0%と、前年(91.5%)に比べ微減となった。乗鞍岳においても、令和元年12月1日から、届出を義務付ける対象エリアとなっている。

区分 提出別	発生件数 (件)	遭難者数(人)				
		死亡	行方不明	負傷	無事救出等	計
提出	21	3		12	6	21
未提出	4			3	1	4
計	25	3		15	7	25

## 8 遭難パーティーの人数構成状況

昨年は、コロナ対策の影響で少人数での登山が多く見られ、ツアー登山やガイド登山中における遭難事故の発生は無かった。

区分 構成別	発生件数 (件)	遭難者数(人)				
		死亡	行方不明	負傷	無事救出等	計
単独	16	2		8	6	16
2人	4	1		2	1	4
3人	4			4		4
4人	1			1		1
5人	0					0
6人～10人	0					0
11人以上	0					0
計	25	3		15	7	25

## 9 遭難事故の届出状況

本人や同行者及び目撃者の110番、119番通報はもちろんのこと、本人や同行者が山小屋へ救助要請を行う事案も多い。

届出方法	区 分	救 助 要 請 者			計(件)
		遭難者本人 及び同行者	遭難事故の 目撃等	家族・勤務先・ 知人からの届出	
携 帯 電 話 110 番		11	1		12
携 帯 電 話 119 番		2			2
山 小 屋 に 救 助 依 頼		4	3		7
山岳警備隊等に直接救助依頼					0
地 元 警 察 を 通 じ て 届 出		1		1	2
そ の 他		2			2
計		20	4	1	25

## 10 遭難者の年齢別状況

40代未満での救助者は3人だけとなり、いわゆる中高年と言われる40代以上で22人(88.0%)と多発した。

年齢別	区 分	遭 難 者 数 (人)				計	
		死 亡	行方不明	負 傷	無事救出		
10 歳 未 満						0	3 (12.0%)
10 代						0	
20 代					1	1	
30 代				1	1	2	22 (88.0%)
40 代		1		6		7	
50 代		1		3	1	5	
60 代				3	3	6	
70 代		1		2	1	4	
80 歳 以 上						0	
計		3	0	15	7	25	(100%)

## 11 遭難者の職業別状況

会社員は依然として多いが、遭難者の高齢層では、無職者が会社員に次いで発生している。

職業別	区分	遭難者数(人)				計
		死亡	行方不明	負傷	無事救出等	
会社役員・会社員		2		8	4	14
公務員				1		1
医師・看護師				2		2
団体職員				1	1	2
自営業				1		1
無職		1		2	1	4
その他					1	1
計		3		15	7	25

## 第3 山岳警備活動の状況

### 1 山岳警備活動の概況

北飛山岳救助隊(岐阜県北アルプス山岳遭難対策協議会附置機関、以下「救助隊」という)と、岐阜県警察山岳警備隊飛騨方面隊(以下「警備隊」という)は、共に年間を通して活動を行っているが、令和2年中はコロナウイルス感染拡大防止対策の為、民間である救助隊員は、新穂高登山指導センターにおける日帰り勤務のみ実施、山岳情報の収集等を中心に活動を行った。

### 2 安全登山指導活動の状況

#### (1) 新穂高登山指導センター

北アルプス岐阜県側登山口の新穂高温泉において、各登山シーズン中「登山指導センター」に隊員を常駐させ、登(下)山届の受理、山岳情報の収集・提供等、登山者に対する安全指導等を実施した。

また、穂高常駐、山岳パトロール、遭難事故出動時における無線中継やセンターにおける登山指導を中心に実施した。



#### (2) 山岳パトロール活動

警備隊は、緊急事態宣言が出た春山以外の警備期間中において、例年より回数を減らしてパトロール活動を実施した。

### (3) 穂高常駐活動

冬山警備以外の期間、穂高岳山荘を拠点として、遭難事故の多発する穂高連峰の常駐警備を実施し、登山者の安全指導と遭難者の救助活動に当たった。

活動別	区分	延活動日数 (日)	延活動人員(人)		
			救助隊	警備隊	計
登山指導センター常駐		72	36	72	108
山岳パトロール		29		60	60
穂高常駐		40		117	117
計		141	36	249	285

### 3 山岳遭難救助活動の状況

延出動日数は41日と少ないが、遭難事故1件当たりの平均出動日数は、1.6日、平均出動人員は13.1人(救助隊0.9人、警備隊12.2人)となった。

年別	区分	延出動日数 (日)	延活動人員(人)		
			救助隊	警備隊	計
平成28年		61	82	595	677
平成29年		44	40	349	389
平成30年		60	14	451	465
令和元年(平成31年)		54	18	420	438
令和2年		41	23	304	327

#### 【主な救助活動事例】

- 1月、2人パーティーの1人が、西穂高岳独標付近で足を滑らせ滑落し、同行者から110番通報で救助要請。

県警航空隊と警備隊で捜索を開始したところ、稜線から飛騨側へ約150メートル滑落した地点で30代男性を発見、県警へりにて救助、病院へ搬送した。

遭難者は肋骨骨折、肺の損傷など重傷。

- 2月、2人パーティーで涸沢岳西尾根を下山中、1人が滑落して行方不明となり同行者から高山警察署へ通報。

県警へりと警備隊が捜索を行っていたが、天候が安定せず雪崩の危険性も高く、その後、群発地震も発生し収容は難航。

6月に入り、捜索中に遭難者を荷継沢で発見、県警へりと警備隊で収容した。

- 8月、単独で折立から新穂高まで縦走中の30代男性が、休息中に意識を失い倒れたため、通行中の別の登山者が救助要請。

双六小屋従業員(北飛山岳救助隊山小屋班)が、山小屋から酸素ボンベを搬送すると共に、一報を受けた県警ヘリと警備隊員も現場へ駆けつけた。

現場付近の天候が悪かったことから、ピックアップ可能地点まで背負い搬送、県警ヘリにより病院へ収容した。

- 10月、奥穂高岳を登山中の40代男性が「ジャンダルム付近で滑落して動けなくなった」と自ら110番通報し救助要請。

秋山警備で常駐中の警備隊員が現場へ急行、ロバの耳直下に滑落した遭難者を発見し、飛来した県警ヘリにより遭難者を救助、病院へ搬送した。

骨盤骨折等で重傷。

- 10月、単独で奥穂高岳へ登山中、奥穂高岳山頂付近でみぞれが降りだし、天候悪化から低体温で動けなくなり自ら119番通報し救助要請。

通報を受け、穂高岳山荘従業員(北飛山岳救助隊山小屋班)が現場へ駆けつけた所、間違い尾根付近で遭難者を発見、低体温により自力歩行が困難なことから、背負い搬送で穂高岳山荘へ収容。

翌日、体力が回復し、歩行ができるようになったことから自力下山。

#### 4 ヘリコプターの活用状況

令和2年中の遭難事故におけるヘリ出動件数は、25件の遭難事故のうち、20件と、8割の遭難事故に出動し多くの人命を救っている。

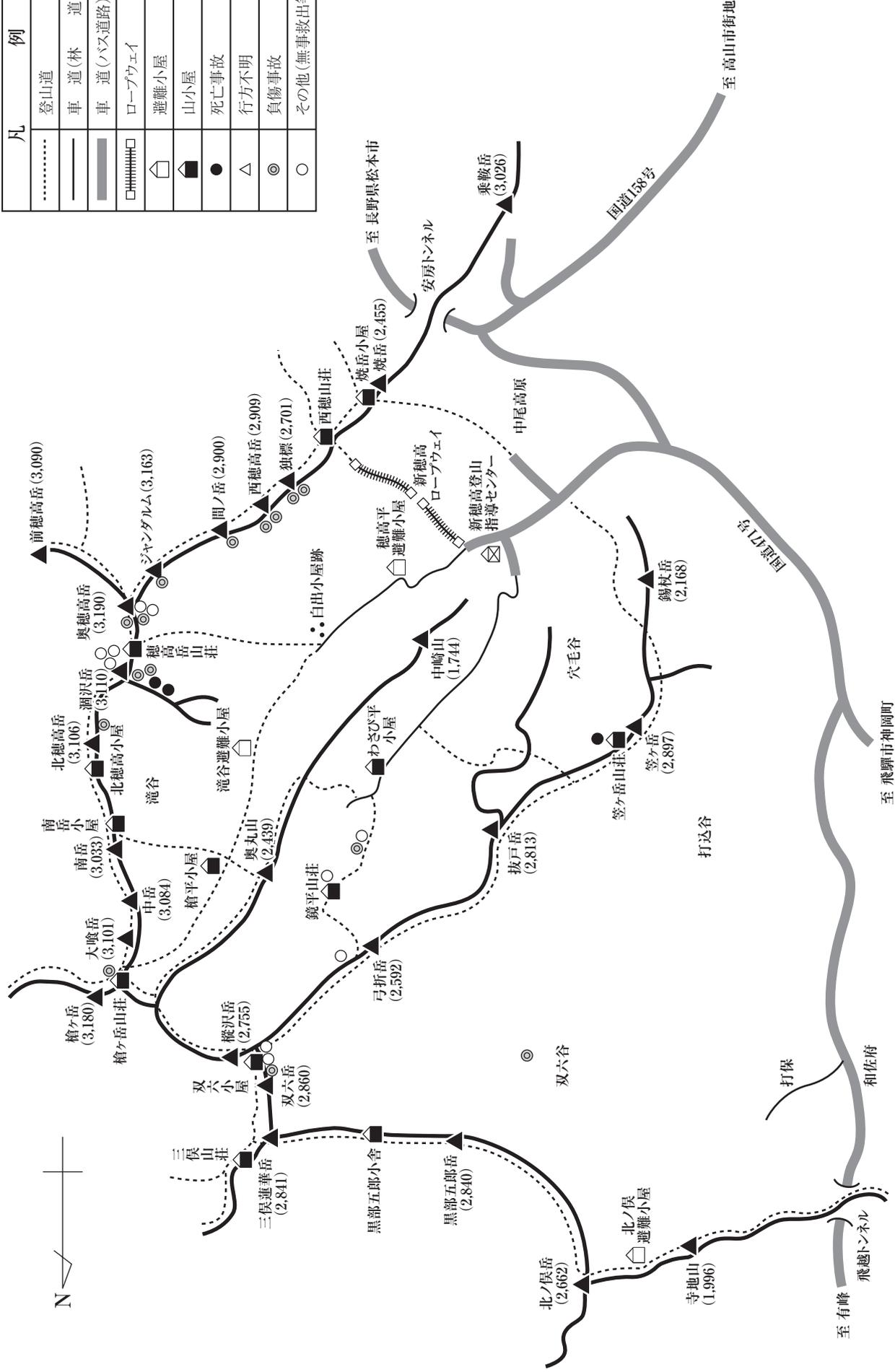
年 別	区 分	発生件数(件)	ヘリコプター 出動件数(件)	出動率(%)
平成28年		51	40	78.4
平成29年		40	26	65.0
平成30年		34	22	64.7
令和元年(平成31年)		47	33	70.2
令和2年		25	20	80.0

※1件1出動として計上

# 令和2年 山岳遭難事故発生分布図

別表1

凡	例
.....	登山道
——	車道(林道)
——	車道(バス道路)
□	ロープウェイ
◻	避難小屋
◼	山小屋
●	死亡事故
△	行方不明
◎	負傷事故
○	その他(無事救出等)



## 山 岳 白 書

発 行 令和3年3月  
発 行 者 國 島 芳 明  
編集責任者 中 島 美 奈 子  
発 行 所 岐阜県北アルプス山岳遭難対策協議会  
URL <http://www.kitaalpsgifu.jp/>  
Mail [info@kitaalpsgifu.jp](mailto:info@kitaalpsgifu.jp)  
印 刷 所 高山印刷株式会社